

本書に寄せて

元日本取引所グループCEO 齊藤 惇



此の書は、著者永山妙子女史の男性社会への挑戦、奮闘記である。

東洋英和女学院を卒業して生業を求めて男社会へチャレンジするうちに、自然にアメリカやフランスの金融機関で36年間も活躍することとなった実話の集積が興味深い。日本と欧米との金融界における長期にわたる制度上の闘いや金融技術の格差を、身をもって経験しながら必死で人との縁を求め、米国大陸を東から西へ若い女身一人でヒッチハイクをするなど、あらゆる環境への挑戦を繰り返し、自分の運命の扉を開くための闘争を積み重ねた結果は、今や日本中はもとより、世界中の貴重な人々との繋がりという宝の山を残す事となっている。

面白いのは、日本における病的なまでの男尊女卑の慣習が、彼女の「人生の障害以外の何物でもなかった」と厳しい言葉を投げかけつつも、文中のあちらこちらに「自分のお墓は日本」とか「世界の中の日本頑張れ」という声援が見え隠れしている。「礼節を重んじる日本人魂」も頼もしい。

外国で働くとよく「日本人は日本のことを知らない」と言われることが多いが、著者は若い時からこの認識を大事にして確り日本のことを学んだ上で、基本となる英語に磨きをかけ、外資系金融機関で大成していることに感心させられる。

日本のファスト・フード産業史上、歴史的人物と記憶されている藤田氏との縁は、彼女を正しくキャリア・ウーマンへ邁進させた事件であったと思われる。

今騒がれるベンチャー・キャピタルのはしりを成功させ、金融業のプロとして艱難に打ち勝った飲びが紙面いっばいに感じられる。

その後、伝統的商業銀行から一躍、当時破竹の勢いで伸びていた投資銀行へ身を置き、更なる飛躍に成功している。

現在も同友会で活躍する著者が、この本を通して多くの若者やキャリアにチャレンジしておられる女性の方々に大いなる指針と勇気を与えることは間違いない。